
啓河物語

小宮山蘭子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

啓河物語

【Nコード】

N8571P

【作者名】

小宮山蘭子

【あらすじ】

昔、「誠」という国があり、そこには「啓河」という大きな河が流れていました。誠の民たちは、孝陽帝という素晴らしい指導者の下で豊かに平和に暮らしていました。ところが……

（前書き）

この作品は、覆面企画「仮面舞踏会2010」参加作品です。

むかしむかし、「誠^{せい}」という国がありました。

誠国にはとても大きな森林地帯があり、その中心を「啓河^{けいが}」と呼ばれる広く長い川が流れていました。民の多くはその森林や川から自然の恵みをうけながら、豊かな生活を営んでいました。

誠国を統一した皇帝の孝陽^{こうよう}はとても賢くやさしい人で、国の宝物である自然を守り人々が平等に仲良く暮らせる国づくりのために知恵を絞ってきました。そのため誠国は長きに渡って、争いのない平和な国として栄えてきました。周辺にある近隣の国々とも仲が良く孝陽帝の素晴らしさは他国にも轟いていました。

孝陽帝の後・花青妃^{かせい}も、とても慈悲深く清らかな人で『民の母』として国中の尊敬を集めていました。

けれどもある時、孝陽帝が重い病で倒れ、もう長くは生きられないかもしれないと診断されてしまいました。

孝陽帝と花青妃には跡継ぎとなる子供がいませんでした。ですから孝陽帝は、

「もしも私が死んでしまうようなことがあったら、この誠国を最も愛している者に皇帝の座を譲りたい」

と、言いました。皆は、それが武元^{ぶげん}という大臣の一人のことを言っているのだろうと思いました。武元はとても真面目に孝陽帝に仕え、国のために大きな力を発揮していたのです。

ところが、武元は良い人のふりをして、孝陽帝や回りの人たちをだましていたのです。「いつか自分が皇帝になりたい」という野望を隠して仕えてきたのです。孝陽帝が倒れたのも、武元が食事に少しずつ毒草を入れていたからです。孝陽帝の病いが悪化すると、武元はいよいよ正体を現しました。病床の孝陽帝が跡継ぎの名前をはつきりと言わないうちに、孝陽帝の字を真似て「自分が死んだら

皇帝の位を武元に譲る」と書いた偽の遺言書を作っていたのです。武元は、だんだん人が変わったように強く偉そうな態度で振る舞うようになりました。

そしてついにある夜、孝陽帝の薬を強い毒とすりかえ、殺してしまっただのです。

孝陽帝の妻・花青妃だけは、遺言書がおかしいことに気づき「もしかしたら……」と疑いを持っていましたが、それを証明することができません。数人の者に相談をもちかけましたが誰も武元の企みを暴くことができず、武元は偽の遺言書どおりに皇帝になってしまいました。

「これで、この国のすべては私のものになった」

これを境に、誠は全く別の国のようになってしまったのです。

武元は自分が新しい皇帝になったことへ祝いの気持ちを表すように、国民にたくさんの金品や食料を宮廷に届けるようおふれを出しました。武元帝が求めたのは、孝陽帝の時代の十倍にもあたる貢物でした。「そんなにたくさんは無理です」と言って従わない人のところには多くの兵士を送り込んで脅させ、それでも言うことを聞かない人は迷わず殺してしまうようにと命じました。人々は恐れおのき、言われたとおりに貢物を差し出すしかありませんでした。こうして、ほとんどの民の蔵は空っぽになり、思いもよらなかった苦しい生活に突き落とされてしまったのです。

そのようなひどい命令を出した武元帝はと言うと、民から吸い上げたお金で宮廷を見たこともないほど豪華な建物に作り変えました。そこで贅沢三昧の暮らしを始めたのです。

心を痛めた元の皇后・花青夫人は、武元帝に考えを改めるよう強く求めましたが、武元帝は、

「花青夫人は夫を亡くした悲しみのあまり、気が変になった」

と言い、地下の牢獄に閉じ込めてしまいました。

孝陽帝の時代から宮廷に使えていたたくさん的大臣や家来たちが激しく怒り、

「今すぐ考えを改めて、花青夫人を釈放し、孝陽帝のような素晴らしい皇帝になってください」

と進言しましたが、武元帝は自分に反対意見を唱える人たちを次々に捕え、従わない人たちは容赦なく処刑して行きました。

その中で武元帝が最もむごい方法で罰を与えたのは、紫水しすいという男でした。

紫水は、森林の奥・啓河の上流にある小さな村で子供たちを集めて学校を開いていました。昔は宮殿で仕事をしていて孝陽帝にも信頼されている素晴らしい人でしたが、

「この国の未来のために、立派な子供たちをたくさん育てたい」と申し出て、先生になったのです。紫水は学問だけでなく生きていくために大切なことや心の教育を施し、また孝陽帝がどんなに素晴らしい指導者であるかも話して聞かせていました。そんな紫水のもとに多くの少年たちが集い、一生懸命学問に励んでいました。中でも、永進えいしんという19歳の若者は、幼い頃に両親を亡くしたことから紫水のことをまるで父親のように慕い尊敬していました。永進はとても働き者で賢く、紫水の手伝いをしながらその尊い教えをたくさん吸収していました。

紫水は、孝陽帝が亡くなり、さらに花青夫人が牢に入れられたと知って、強い悲しみと怒りに震えました。永進は、いつもは穏やかな紫水がそれほどまでに怒っている姿を見るのは初めてでした。永進は尋ねました。

「先生、この国はどうなってしまうのでしょうか？ 僕たちの未来は

……」

不安で胸が張り裂けそうでした。紫水は柔らかな表情に戻り、永進の頭を撫ぜながら言いました。

「永進、この先どんなに厳しく残酷な目にあっても、命ある限り決してあきらめてはいけませんよ。たくさん大人のたちが武元に押しつぶされようと、この国の未来を担う君たちだけは希望を死滅させてはならないよ」

「でも、どうやって……」

「たとえどんなに時間がかかっても、悪いことは悪いのだときちんと訴えていかなければならない。決して泣き寝入りをしてはいけません。この国を変えたい、幸福になりたいという人たちが心を一つにするんだ。団結の力はどんな武器よりも強いんだよ」

紫水は続けました。

「どんな権力も、人々の心の奥底にある希望や夢や誇りを奪い去ることなど決してできないのだから。私はこの国や君たちを守るために立ち上がるよ。一緒に頑張ってくれるかい？」

永進は瞳を輝かせ「はい、先生！」と、力強く返事をしました。

ところがある日、紫水のもとにたくさんの兵士たちが詰め掛けてきました。紫水は面と向かって武元帝に反抗したわけではありませんでした。武元帝はずっと以前から、紫水の賢さや人を惹きつける力を恐れていたのです。孝陽帝が皇位を継がせたかったのも、本当は紫水だろうと思っていました。ですから、紫水が何か行動を始める前にその力を奪ってしまおうと考えたのでした。また武元帝は、以前から孝陽帝と花青夫人に可愛がられていた紫水を妬ましく思っていて、他の人に対するよりもずっとずっと強い憎しみを持ち続けてきたのです。

武元帝は罪のない紫水を牢に閉じ込めてしまいます。それ知った家来たちが入れ代わり立ち代わり訪れて、

「紫水を慕っている子供たちのためにも、せめて命だけは助けてあ

げてください」

と、願い出ました。ところが、たくさんの人が紫水や子供たちを大切に思っているとわかった武元は、ますます紫水への妬みを募らせることになったのです。そうしてとうとう、

「見せしめのため、多くの民や子供たちの見ている前で紫水を処刑せよ！」

と、命令してしまったのです。

処刑の日、紫水の教え子たちが宮廷の庭に連れて来られました。

その中にはたった一人の女の子・杏々（あんあん）もいました。武元帝はそんな小さな少女にさえ、

「紫水が殺されるところを、しっかりと見ろ。決して目を閉じてはならない」と、強く命じました。

処刑場に連れてこられた紫水は、破れた薄い布を身体にまとい全身傷だらけでした。子供たちは涙を流しながら「先生！」と言って駆け寄ろうとしましたが、兵士たちに止められてしまいます。大きな椅子にどっかりと座った武元帝は、酒の入った杯を揺らしながら「子供たちよ、私の言うことを聞かない奴はこうして死んでいく運命なのだ。負け犬の最後をよく見ておくがいい。そして、こんな男から聞かされた教えなどきれいさっぱり忘れ、私への忠誠心をしっかりと胸に刻むのだ」

と、言いました。

けれども、首切り台に曳かれていく紫水は頭を上げて力強く歩き、その瞳にもしつかりとした強い光が揺れていました。そこには、

「決して心までは武元に負けていないのだ！」

という想いがあふれていました。紫水は永進に向かって言いました。

「みんなを頼むよ」

永進は唇をかみしめて頷き、心の中で叫びました。

「先生！ 先生から教えていただいたことは絶対に忘れません。僕がみんなに伝えて行きます」

紫水はまるでそれが聞こえたかのように、

「ああ、信じているよ」

と、にっこり微笑みました。

やがて、首切り台に乘せられた紫水は、厳しいまなざしで武元帝を見つめて言いました。

「どんなに大きな悪も、たった一つの小さな善にはかなわないのです。あなたは必ず滅び去っていく運命なのです」

武元帝は立ち上がり、鬼のような顔つきで酒杯を叩きつけると、

「そいつを黙らせる！ 早く首を切り落としてしまえ！」

と、怒鳴り散らしました。武元帝に怒鳴りつけられ慌てた首切り人は、目を閉じたまま勢いよく剣を振り下ろしました。皆の悲鳴が上がりました。

その瞬間、永進は女の子・杏々の瞳を手で覆ってあげましたが、自分は目をそらすことなく紫水の最期をその心にしっかりと焼き付けたのでした。

永進は紫水と過ごした間、紫水から教えられたことを細かく書き留めていました。紫水が亡くなった夜、月明かりの下で紫水の遺した言葉の一つ一つを泣きながら読み返しました。

『人の生命ほど重いものはこの世にはない』

『壁が立ちはだかった時に最も大切なのは、勇気』

『誰よりもやさしい人は、誰よりも強くなれる』

『一番苦しみ一番努力した人が、一番幸せになれる』

『あきらめの心に勝っていく』

永進は何度も繰り返し読み、紫水という人はその言葉どおりの生き方を貫いた人だったとあらためて実感していました。自分がそのような素晴らしい師にめぐり会えたことにはきつと大きな意味があるのだと思い、

「偉大な師匠の言葉を証明するためには、今度は自分がそれを実現

して行くしかない」

という想いが湧き上ってくるのを感じていました。

紫水の教えの中に、

『使命とは命を使うこと。命とひきかえにしても惜しくないものに、すべてをかけること』

と、ありました。

永進は森林奥の山にこもり、紫水の言葉の数々を清書して一冊の本を作ろうと決心しました

永進が本を完成させたのはその二年後でした。永進はその本を『^{しずくしよ}雫書』と名づけ、人々に広く読んでもらえるように同じものを千冊も作りました。長い間休む間もなく懸命に書写していたために、永進の右手は二度と筆が握れないほどぼろぼろになっていました。

一方、武元帝の悪政は続いており、誠の国民たちは相変わらず貧しく苦しい生活を強いられていました。美しかった森林は荒れ放題となり、武元帝に処刑された人たちの墓が到る所に建てられていました。また啓河の下流は、宮廷から大量に垂れ流されるゴミなどですっかり汚れてしまいました。

山を降りた永進は、そのような光景を目の当たりにしてたいへん胸を痛めました。逸^はる気持ちを押さえ、まずは学校の取り潰しによつて家に戻っていた紫水の教え子たちを探して歩くことにしました。けれど、様々な村に足を運んでやっと友を探し当てることができて、再会の喜びを分ち合うことはできませんでした。かつての友やその家族のほとんどは貧しい生活に疲れ果て、生きる氣力を失っていたのです。

永進は不自由な右手で農作業を手伝ったり、落ち込んでいる人たちの話し相手になったりしながら、その心に丁寧に語りかけていきました。そして、ことあるごとに紫水の教えをしたためた『雫書』

を読み聞かせました。最初は石のように頑^{かたく}なだった人々の心が、永進が根気よく対話が続けることで少しずつほぐされていきました。中でも、かつての教え子たちの変化には目を見張るものがありました。一人二人……と、生命力あふれる瞳を確実に取り戻していったのです。『雫書』に触れた教え子たちの心には、師の姿が鮮やかに蘇っていました。

また、こうして立ち上がった者たちは永進と同じように民の家を訪ねて歩き、人々を励ましていくようになりました。それにより、永進一人では大変な時間が必要だった活動がいつぺんに大きな広がりを見せ始めました。皆は武元帝に悟られないよう昼間は黙々と働いていましたが、夜になると集まって『雫書』を読み合うようになっていました。

ある夜、小さな人影が暗い森の中を足早に歩いていました。民たちの変化や『雫書』のことを武元帝に告げ口するために、宮廷に向かっていたのです——それはかつて、紫水の処刑場で、その最期の瞬間に永進から目を覆ってもらった少女・杏々の成長した姿でした。杏々は、紫水や永進との美しい思い出を忘れたわけではありませんでした。けれども、処刑場で味わった恐怖が今でも大きく残っていて、とても戦う気持ちになどなかったのです。永進たちと一緒にに皇帝に歯向かったら今度は自分が首をはねられてしまうかもしれない……そう思うと、恐ろしくて生きた心地がしませんでした。ですから、

「私は永進たちとは関係ありません」

と、武元帝に知らせておこうと考えたのでした。

宮廷にたどり着くと、多くの兵士たちが見回りをしていました。武元帝はとても用心深かったので、夜間も昼と同じように警護をするよう言いつけていたのです。二人組の兵士が杏々を見つけて走り

より、剣をつきつけて問いただしました。

「こんな夜遅くに、おまえのような小娘が何の用だ？」

「武元帝にお知らせしたいことがあって参りました」

「皇帝に知らせたいこと？　どんなことだ？」

「はい、民の中に武元帝を倒そうとする人たちがいて、ひそかに仲間を集めています」

「何だと?!」

二人の兵士は顔を見合わせ、しばらく考え込んでいました。けれどもやがて、

「わかった。俺たちについて来い」

と、言いました。杏々はほっとし、その兵士たちの後に続きました。兵士たちは宮廷の中には入らず、啓河のほとりの方へ歩いていきました。

杏々は兵士たちに導かれてある小さな家にたどり着くと、驚いて座り込んでしまいました。

そこはなんと、永進の隠れ家だったのです。永進は、兵士たちと杏々の三人を見て不思議そうに言いました。

「こんな夜更けにどうしたんだい？」

兵士の一人が笑みを浮かべ、

「このお嬢さんが、君に話があるようだよ」

もう一人は、杏々を見下ろして言いました。

「この子を見つけたのが俺たちでよかった」

つまり、兵士たちは永進の味方だったのです。『稟書』はすでに武元帝を警護する兵士たちにすら知られるようになっていたのです。かつて兵士たちは、国を守り民たちを助けるといふ仕事に誇りを持っていました。けれども今は、武元帝の言いつけのままに罪のない人たちを殺さなくてはならない——そんな残酷な仕事をさせられることを嘆き、苦しい想いで暮らしている人ばかりでした。しかも、武元帝にこき使われ、ほとんど寝る間もないほど働かされていたの

です。

兵士たちの多くが、『雫書』で初めて知った紫水の教えに心を揺さぶられていました。そして、永進たちへの協力を願い出る人が少しずつ増えていたのです。

杏々は自分が皆を裏切ろうとしたことがわかってしまい、今度は永進たちに罰を与えられるかもしれないと思つて震えました。

けれども永進は杏々のことを知つても顔色一つ変えず、やさしさに満ちたまなざしをたたえています。永進はふと、杏々の手に目をやりました。その小さな指はあちらこちらひび割れ、赤くなっていました。朝から晩まで両親の農作業を手伝っているためでした。永進は言いました。

「杏々はとても字が綺麗だったね、紫水先生がみんなの中で杏々が一番上手だとおっしゃっていたよね」

そのとき——杏々の耳に懐かしい紫水の声が蘇りました。

「杏々は女の子なのに“学びたい”と思うなんて、とても志が高くすばらしい子だね。心優しい花青妃のような女性になるんだよ」

そう言つて抱きしめてくれた懐かしい師匠の笑顔が、永進と重なりました。

「僕はこの右手ではもう筆が持てないんだ。これからは君が僕の代わりに『雫書』を書き写してくれないかい？」

杏々は驚いて、

「どうして怒らないの？ 私、みんなのことを告げ口しようとしたのに……」

「【それはもう、終わったことだから】。今この瞬間から、変わればいいんだよ。それに、君の気持ちはとてもよくわかる。僕だつてすぐく怖くなる時があるんだ。負けそうな自分の心といつも戦っている。きっと、僕たちがまず初めに倒さなくてはならないのは武元じゃなくつて、そんな自分の中の弱い心なんだよ。一番の強敵である自分の弱さに勝てれば、もう怖いものなんてないんだ」

永進は杏々の荒れた手を握り、

「心配しなくていいよ。そうして立ち上がった一人一人の勇氣と固い団結があれば、武元なんて全然怖くないんだよ」

と、微笑みました。杏々はぼろぼろと涙をこぼしました。恐怖や不安で真つ暗だった心の森に、まばゆい太陽の光が射したようでした。次の日から、杏々は永進と一緒に『雫書』を書き写す仕事を始めました。多くの人が『雫書』を求めるようになったため、永進の作った千冊はもう残りわずかだったのです。ある時、杏々は永進に尋ねました。

「どうしてこの本を『雫書』と名づけたの？」

「僕たち一人一人は小さな雫かもしれない。だけど、雫がたくさん集まれば啓河のような大河にだってなれるんだ。それは無限の海に繋がっている——紫水先生の言葉だよ」

杏々は、

「『大きな川や海が小さな雫の集まりだなんて思ったの、生まれて始めてかもしれない』」

と言い、自分がその尊く美しい雫の一つになれることに大きな喜びを感じていました。永進は、

「啓河もきつと、昔の美しさを取り戻せるはずだよ」と、言いました。

地下に閉じ込められている亡き孝陽帝の後・花青夫人は、昔から夫人の側に仕えてきた信頼できる家来たちに世話をしてもらいながら、二年間なんとか命をつなぎとめてきました。

ある時、家来の一人から永進や『雫書』の話聞きとても驚きました。

「なんですって?! ああ紫水の教え子たちが」

花青夫人は、

「ああ、なんて心強いことでしょう。青年たちの力できつとこの国は変わります。私はその時を信じて待ちます」

と、固く決意しました。胸中には、亡き夫・孝陽帝が頷いている姿が浮かんでいました。また、

「私もいつかここを出て、民のために力を尽くしたい」

と思うと、いてもたってもいられませんでした。若者たちの行動にあらためて勇気と希望を与えられ、胸躍る気持ちになっていました。

孝陽帝が亡くなり武元が皇帝になってから間もなく丸三年という時――

武元帝は、自分が皇帝に即位した記念日に大々的な式典を開催すると言い出しました。武元帝の最も近いところで仕えていた三人の大臣は、

「国民にたくさんの祝いの品を納めさせましょう」

「当日は宮廷に国中の要人を集めて、盛大な祝宴を催しましょう」

「他国の人々も招いて、誠国の力を見せ付けてやりましょう」

と、口々に言いました。しかし三人の大臣たちは、武元帝に逆らわずに勤めていれば自分の身が守れると考えていただけで、武元帝の力になってあげたいとは少しも思っていないません。もちろん、民のことなど眼中にありません。武元帝が死ぬのを黙って待っているだけなのです。そして、次の皇帝に選ばれるのは3人の中で誰か？――そんなことばかり考え、競うように武元帝へのご機嫌取りをしていました。

また、武元帝自身にも変化が現れていました。これまで贅沢の限りを尽くし好き放題にやってきた二年間――周りにはたくさんの財宝を並べ、きらびやかな衣装をまとい、食事も高級でおいしいものばかりをとっていました。けれども、何でも手に入ることが当たり前となってしまうと、今度は「欲しいもの」が全くなくなってしまう

つたのです。つまり、もう何をしても嬉しいと感じたり感動したりということがなくなっていたのでした。おまけに、力づくで人を押さえつけて言うことを聞かせているだけで、心を許せるような部下など一人もいなかったのです。いつか誰かに皇帝の地位を奪われるかもしれないと思うと心から安らげる時間はなく、常に人を疑いの目で見てしまうといった状態が休みなく続いていました。武元帝はいつもいらいらして人に当り散らし、充実した気持ちを心の底から味わうことができず、虚しさや寂しさにさいなまれる日々を送るようになっていました。式典を開こうと言い出したのも、ただの退屈しのぎに過ぎなかったのです。

国中に「国民は皇帝へのお祝いの品を納めるように」という看板が立ちました。招待状を送った他国の要人たちからは「ぜひ参加させていただきます」と返事が来ました。また、宮廷の家来たちは、飾り付けや料理などの準備におおわらわでした。武元帝は、自分のためにたくさんの人たちが懸命に動き回っているのを見て満足し、上機嫌になっていきました。

ところが――

式典がいよいよ明日に迫った前夜、武元帝のもとに大臣の一人が顔を真っ青にして飛び込んできたのです。

「大変です！ 地下牢が破られました！！ 花青夫人が何者かに連れ去られた模様です！」

「何だと?!」

確かに花青夫人がいた牢はもぬけの殻でした。

「明日は大切な日だと言うのに……いったい誰が手招きをしたんだ?!」

武元帝は顔を真っ赤にして怒り狂い、兵士たち全員を集めて国中

すみずみ探すよう命令を下しました。

けれども、朝になつても花青夫人が見つかったという知らせは届きません。武元帝は動揺のあまり荒れ狂い、式典の準備どころではありません。けれども、他国からの出席者が到着し式典開始の時刻が近づいていました。武元帝は誠の国内で重大な事件が起こっていることを知られないために、騒ぐ気持ちを押し殺さなくてはなりませんでした。他国の人たちは、本当に誠国が栄えているかどうかを確めに来るのです。馬鹿にされるような失敗は許されないのですでした。

いよいよ武元帝即位三周年記念式典の時間になりました。武元帝は心を落ち着かせ、大勢の人たちが待っている宮廷一の大広間へと向かいました。ピカピカに磨き上げられた長い廊下を歩きながら、「とにかく式典さえ無事に済ませれば、すぐに花青など見つけ出してやる」

と、はき捨てるように言い、三人の大臣も

「そうですとも。必ず連れ戻します」

と、うやうやしく言いながら後に続けました。

ところが、式典の会場に足を踏み入れると――武元帝は驚きのあまり、思わずよろめいてしまいました。大臣たちはぼかんとして突っ立っていたため武元帝を支えることができず、武元帝は尻餅をついてしまいました。

大広間にはひしめくように多くの民がいたのです。そのほとんどが、泥にまみれ薄汚れた格好の人たちばかりでした。

「何だこいつらは?! ということだっ?!」

武元帝は大臣に向かって叫びました。当然のことながら、武元帝や大臣たちが民を式典に招くなどありえなかったのです。

「すぐにこいつらを外に出せ! 兵たちを呼んで来いっ!」

そこに数人の兵士たちが走ってきました。しかし兵士たちは大広

間には入らず、入り口に立っている武元帝と三人の大臣を取り押さえたのです。

「な、何をしておる！」

混乱した武元帝は声を裏返して叫び散らしましたが、すぐにそれはかき消されました。

大広間に、澄んだ大きな声が響き渡ったのです。

「只今より、花青夫人の皇帝就任式を始めます」

「な……何?!」

武元の目には、壇上に立つ若者の姿が飛び込んできました。――永進でした。

次の瞬間、場内には割れんばかりの拍手と歓声が沸き起こりました。花青夫人が姿を現したのです。夫人はかつて皇后として輝いていた頃と少しも変わりなく、美しいたたずまいで皆に微笑みかけました。

出席していた他国の人たちは立ち上がり、晴れやかな表情で花青夫人に挨拶をしました。他国に送られた招待状は永進たちによつてすりかえられ、皆「皇帝交代の儀式があります」という知らせを受けて訪れた人たちだったのです。

永進は『零書』を広めながら、「皆が幸せに暮らせていた昔の誠国を蘇らせるには、新しい指導者が必要です」と、訴え続けてきたのです。そしてその人物は、民の母・花青夫人しかいないと思っていました。武元帝の即位三周年式典に他国の人たちも招待されると知った永進は、そのときが皇帝を交代させる絶好の機会だと考えたのです。ですから、怪しまれないようぎりぎりまで待ち、式典前夜に花青夫人を救い出しました。この作戦には、『零書』に心動かされた多くの兵士や宮廷の使用人たちが協力しました。皆が式典の準備を嬉しそうにしていたのは、式典が武元を祝うものではなく新しい皇帝が誕生する素晴らしい出発の儀式だからでした。

永進は時間をかけて一枚の岩のような団結を築くことで、誰の血も流すことなく皇帝を交代できるよう、必死で活動してきたのだ。

武元の手をつかんでいた兵士が言いました。

「今はもう、この国にはあなたについていこうとする者など一人もいないでしょう。だからこそ、こんなことができたのです。この歴史的な瞬間を、ここでしっかり目に焼き付けてください」

そして、懷から『雫書』を取り出し、

「このたった一冊の本が、誠国を変えたのです」

震える手で本を手に取りページをめくる武元の目に、『紫水』の文字が飛び込んできました。

「紫水……だと？」

処刑される瞬間、紫水が言い放った言葉が蘇りました。

『どんなに大きな悪も、たった一つの小さな善にはかなわないのです。あなたは必ず滅び去っていく運命なのです』

武元はがっくりと膝を落としました。

そんな武元と3人の大臣の耳に、窓の外からもざわめきが聞こえてきました。なんとそこにも宮廷の周囲をびつしりと隙間もないほど埋め尽くした多くの民がいたのです。皆は目を輝かせ、「花青帝、万歳！」「誠国、万歳！」と歓喜の声をあげていました。「雫書、万歳！」「紫水、万歳！」そして「永進、万歳！」と叫んでいる人たちもたくさんいました。

誠国の民たちの群れは悠々と流れゆく遙かなる啓河のように揺れ、まぶしい光を放っていました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8571p/>

啓河物語

2011年6月23日20時56分発行